宝治元年『院御歌合』注釈―「逢不遇恋」題―

位藤邦生　森下要治
田野慎二　山崎真克
赤迫照子　藤川功和

はじめに

『長崎大学教育学部紀要　人文科学』第七十五号（平成21年3月刊行）に引き続き、宝治元年（一二四七）『院御歌合』の注釈を試みる。今回は「逢不遇恋」題十三番を取り上げる。各番担当者と所属を以下に示す。

九十二番―位藤邦生（長崎大学）、九十三番―赤迫照子（広島大学図書館）、九十四番―藤川功和（尾道大学）、九十五番―藤川、九十六番―山崎真克（松江工業高等専門学校）、九十七番―森下要治（広島文教女子大学）、九十八番―藤川、九十九番―田野慎二（広島国際大学）、百番―赤迫、百一番―山崎、百二番―田野、百三番―田野、百四番―位藤

凡例

一、底本は、永青文庫蔵本〔一〇七・三六・七〕（『細川家永青文庫叢刊』第八巻所収）を用いた。

一、校合した諸本と略号は、以下の通り。

書―書陵部蔵本〔五〇一・七四〕（『新編国歌大観』の底本）

内―内閣文庫蔵本「百三十番歌合（外題）」〔二〇一・二四七〕

支―九州大学支子文庫蔵本〔九一一・ホ・一〕

聚―書陵部蔵歌合類聚本（『大日本史料』第五篇二十四所収）

群―群書類従本（巻第二百所収）

一、注釈は、番全体の本文【校異】を示した後、【他書所伝】【本歌（参考歌）】【語釈】【通釈】をあげた。

一、【語釈】の内、各詠作者並びに前号までに既出の語彙については、紙幅の関係上これを略した。

一、表記や送り仮名の異同はこれを略し、見せけちや補入符号によって訂正のある箇所は、訂正後の本文を採用した。

一、翻字本文には適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。

一、本文中、異同の存する箇所には、傍線及びイ、ロ、の如き符号を付し、語釈を施した箇所には、本文右傍に①、②…の通し番号を付した。

一、底本で文意不通等が認められる場合、他本の本文に拠り通釈を施した場合がある。その際、本文【校異】【通釈】において他本に拠った箇所に網掛けを施した。

一、引用本文は、原則として『新編国歌大観』に拠り、その他の引用文献は、適宜底本を示した。なお、引用本文には、適宜、傍線、振り仮名等を付した。

一、『万葉集』については、本文、歌番号ともに塙書房刊『万葉集訳文篇』を用いた。

〈九十二番〉

九十二番　逢不逢恋①

左　勝イ　女房

②あかしかねまたる、物となりにけりさしもいとひし鳥の③八声ロも

右　小宰相

④下のおひのあたに結し中なれはめくりあふへき限たになし

左さしもいとひし鳥の八こゑ、またる、物ハになれる

心、き、所おほくゆへふかく思入られてニホ、優美の姿

幽玄の心、ことによろしくこそ侍れ、右下のおひト

あたにむすひしなとは、さもやとみえ侍に、下句

⑤かきりたになしとて、恋心今は思すてたるやうチ

に見え侍リ、題の本意ヌ侍らねは、尤ル為負、

【校異】

イ　勝—ナシ（書）　ロ　八声も—八こゑを（内・支・聚・群）

ハ　物に—物と（内・支・聚・群）　ニ　おほく—多く侍る（群）

ホ　ゆへふかく—ふかく（支・群）　ヘ　入られて—いれて（内・聚）　ト　下のおひ—下のおひの（内・支・聚・群）　チ　恋心—恋の心（書・内・支・聚・群）　リ　見え侍—見侍（内・聚）

ヌ　本意—本意に（聚）　ル　尤—尤可（内・聚）

【他書所伝】

〈左歌〉

『題林愚抄』恋部二・六九六六・「宝治元仙洞歌合」・女房

あかしかねまたるる物と成にけりさしもいとひし鳥の八こゑに

〈右歌〉ナシ

【語釈】

①**逢不逢恋**—「ひとよとはいつかちぎりしかはたけのながれてとこそおもひそめしか」（『金葉和歌集』二度本・恋部上・三九七・「遇不遇恋の心をよめる」・経忠）、「おもひきやあひみし夜はのうれしさにのちのつらさのまさるべしとは」（『金葉和歌集』三奏本・恋下・四四〇・「逢不逢恋のこころを」・実能）とあるのが、歌題としての早い例。院政期・鎌倉期の勅撰集、私家集等に頻出する。なお、「逢不逢恋」「逢不遇恋」「会不会恋」等の表記がある。

②**あかしかね**—夜が明けるのを待ちかねて。「ほととぎす来鳴く五月の短夜も一人し寝れば明しかねつも」（『万葉集』巻第十・一九八一・「夏の相聞（鳥に寄する）」、この歌は『拾遺和歌集』夏・一五二・読人しらず、また人麿の作として『古今和歌六帖』第五・二六九九にも入集）。

③**鳥の八声**—暁に時を告げて多く鳴く鶏。「思ひかねこゆる関路に夜を深みやこゑの鳥に音をぞ添へつる」（『千載和歌集』恋五・九四八五・「隔関路恋といへるこころをよめる」・雅頼）がある。『堀河百首聞書』には「とほつみちいそぎて過ぎし関路には八こゑの鳥を人ぞ

となへし」（『堀河百首』雑廿首・一四一五・仲実）についての注に「庭鳥の声八声なくと申説候へどもたゞしげく啼くといへるまで也」と説明している。「かねのおともやこゑのとりもこころあらばこよひばかりは物わすれなれ」（『建礼門院右京大夫集』二七三）もある。

④下のおひの―下の帯の。枕詞。下の帯は下着、すなわち装束のしたの小袖にしめる帯のこと。帯がいったん左右に分かれて、結ぶときにまた合うところから、「別れて逢う」「めぐりて逢う」などにかかる。「したのおびの道はかたがた別るとも行きめぐりても逢はんとぞ思ふ」（『古今和歌集』離別・四〇五・友則）。小宰相の当該歌でも「めくりあふへき」に掛かる。また「あたに結し」の縁語ともなる。

⑤かきりたになしとて、恋心今は思すてたるやうに―「かきりたになし」については、「すむ月もちさとのほかはこほりしきゆきのあしたはかぎりだになし」（『千五百番歌合』冬三・九七六番右・一九五一・俊成）の如く、空間・距離を示すものがあるが、ここでは同じ『千五百番歌合』恋三・一二九二番左・二五八二「めぐりあはんかぎりはいつとしらねども月なへだてそよそのうき雲」（『新古今和歌集』恋四・二七二・良経、『秋篠月清集』八八六にも）のように、「限り」は「折、機会」の意となっている。「逢不逢恋」の題で「めくりあふへき限たになし」と断定的な口調で言い切るのは「恋心今は思すてたるやうに見え侍」るというのが為家の批判であった。

【通釈】

九十二番　　逢不逢恋

左（歌）　勝　　女房（後嵯峨院）

（あの人が来ない長い夜を）あかしかねて、（自然）待たれるものになってしまったよ、（以前は、暁の別れを誘うものとして）あんなにも嫌っていた鳥の八声も。

右（歌）　　（承明門院）小宰相

（はじめから）かりそめに結んだ（あの人との）仲だから、（今となっては再び）めぐり逢う機会とてないことだ。

〔判詞〕左（歌）あんなにも厭うた鳥の八声が、（今では）待たれるものになった（という）趣旨は、聞きどころが多く趣深く共感を誘われて、（一首全体の）優美の姿幽玄の心は、殊によろしうございます。右（歌の）「下のおひあたにむすひし」などは、そうもあろうと思われますものの、下句（に）「かきりたになし」と（言っ）て、恋の心は（もう）思い捨てているように見えますのが、（逢不逢恋という）題の本意ではございませんので、（こちらを）当然負けといたします。

〈九十三番〉

九十三番

左　　太政大臣

①身をうらの海士のもしほ木②こりすまに③立や④煙のよそにきえつゝ

右　勝イ　　俊成卿女

⑤わけし夜の契ロもきえてハかなしきはとへとこたへぬ⑥道芝の露

左ニの哥のさまよろしき姿ホには侍を、⑦へこりすまと

はかりにてもあひにける心は侍ぬトへけれとも、右分し

夜のといへるより題チ⑧リ心いますこしあらはにヤ、いかゝ、

【校異】

イ　勝―ナシ（書）　ロ　契も―契と（内・支）　ハ　きえて―きゝて（内・支）　ニ　左の哥のさま―左うたのさま（書）、左のさま（内・支・聚・群）　ホ　姿には―姿に（支）　へ　こりすまと―こりすまにと（内・支・聚・群）　ト　侍ぬ―侍（書）　チ　より―よりは（内・支・聚）　リ　題―題の（書・内・支・聚・群）

ヌ　や―侍にや（書・内・支・聚・群）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉『蓮性陳状』一五・俊成卿女

わけし夜の契りも消えて悲しきはとへど答へぬ道芝の露

『題林愚抄』恋部二・六九六七・「（宝治元仙洞歌合）」・俊成

わけしよのちぎりもきえてかなしきはとへどこたへぬ道しばの露

【語釈】

①**身をうらの**―「浦」と「憂」を掛ける。ここでは海士の辛い境遇と、恋の叶わぬ憂き我が身を掛ける。「見るめなきわが身をうらとしらねばやかれなであまのあしたゆくくる」（『古今和歌集』恋歌三・六二三・「（題しらず）」・小野小町）。

②**もしほ木**―藻塩を焼く際にくべる木。「さみだれはあまのもしほ木くちにけりうらべに煙たえてほどへぬ」（『千載和歌集』夏歌・八五・「崇徳院に百首歌たてまつりける時、よめる」・待賢門院安芸）。

③**こりすま**―「こりずまに又もなきなはたちぬべし人にくからぬ世にしすまへば」（『古今和歌集』恋歌三・六三一・「（題しらず）」・よみ人しらず）のように、「懲りもせずに」の意。当該歌では「身をうらの」と結びついて摂津国の歌枕「こりすまのうら」となり、「すま」と「須磨」の意を掛ける。『源氏物語』須磨巻「こりずまの浦のみるめのゆかしきを塩焼くあまやいかが思はん」（一九〇・光源氏）。

④**立や煙のよそにきえつゝ**―浦から遠く余所へと消えていくのに、煙が性懲りもなく立ち続ける様子に、拒まれても懲りずに恋する意を掛ける。「風をいたみくゆる煙のたちいでても猶こりずまのうらぞこひしき」（『後撰和歌集』恋四・八六五・「人のむすめのもとにしのびつつかよひ侍りけるを、おやききつけていといたくいひければ、かへりてつかはしける」・貫之）。

⑤**わけし夜**―「道芝の露」を分け入って相手の許を訪ね、契りを結んだ夜。「ささわけし袖のためしのぬれ衣ほさでいく夜の道芝の露」（『俊成卿女集』三七・「（不逢恋）」）。

⑥**道芝の露**―道端の草の露。「尋ぬべき草の原さへ霜枯れて誰に問はまし道芝の露」（『狭衣物語』四五・狭衣）のように、恋人の許への

道案内を尋ねるものとして詠まれている。また、結んだ契りのはかなさも表現する。「露」と「きえて」は縁語。「みちしばのつゆにあらそふわが身かないづれかまづはきえむとすらむ」（『新古今和歌集』雑下・一七八八・「（題しらず）」・実頼）。

⑦**こりすまとはかりにても**―『新編国歌大観』では「こりずまとは、かりにても」と読点を打つが、ここは「こりずまとばかりにても」とし、左歌は「こりすま」という語がある程度で「逢不逢恋」題に叶っているという文意でとるべきであろう。

⑧**題心いますこしあらはにや**―右歌は「逢不逢恋」題の趣旨がはっきり現れているという評価。「題はあらはに心はこもりて、ことによろしきよし皆悉申す」（建長三年（一二五一）九月『影供歌合』八十五番判詞　※判者は為家）。

【通釈】

九十三番

左（歌）　太政大臣（西園寺実氏）

憂き我が身は、こりずまの浦の海士がくべる藻塩木ではないが、余所に消えつつも立つのを繰り返す煙のように、懲りないことだよ。

右（歌）　勝　俊成卿女

（道を）分け入り、結んだ契りも消えて、悲しいのは道端の草の露に（あの人の許への道案内を）問うても答えないことだ。

〔判詞〕左の歌の様は良い姿でございますが、「こりすま」という程でも逢瀬があった心はございますけれども、右は「分し夜の」といいますことで題の心が（左歌よりも）今少しはっきりしているのではないでしょうか。いかがでしょうか。

〈九十四番〉

九十四番

左　通忠（イ）

限りとも思はてしもや（ロ）契（ハ）①をきしそのまゝにひぬ袖の白露②

右　勝（ニ）　実雄（ホ）　さねを　古本

思ひ侘わか心にも忘れぬ（ヘ）となけ（ト）にいひてもね③はなかれつゝ

左哥下④句すこし心ゆかぬやうに侍うへに、右哥（チ）

心、さる（リ）事も侍なんとめつらしく侍れは、勝侍へきにこそ、

【校異】

イ　通忠―権大納言通忠（書・内・支・聚・群）　ロ　しもや―のみや（支）　ハ　契―むすひ（内・支・聚・群）　ニ　勝―ナシ（書・内）　ホ　実雄　さねを　古本―権大納言実雄（書・内・支・聚・群）　ヘ　忘れぬと―わすれぬを（内・支・聚・群）　ト　なけに―歎（書）　チ　右哥―右うたの（書・内・支・聚・群）　リ　さる―させる（書）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ　〈右歌〉ナシ

【語釈】

①**契をきし**―お互いに約束する意。「千世へむと契りおきてし姫松のねざしそめてしやどはわすれじ」（『後撰和歌集』恋三・七九二・「方たがへに、人の家に人をぐしてまかりて、かへりてつかはしける」・（よみ人しらず））等。当該歌では、「契をきし」は上句と下句両方にかかるか。

②**白露**―「わがごとや君もこふらん白露のおきてもねてもそでぞかわかぬ」（『後撰和歌集』恋二・六二六・「とほき所にまかりけるみちより、やむごとなきことによりて京へ人つかはしけるついでに、ふみのはしにかきつけ侍りける」・よみ人しらず）等の如く涙を暗示する。

③**ねはなかれつゝ**―声をあげて泣く意。「つれづれとながむる空の郭公とふにつけてぞねはなかれける」（『後撰和歌集』夏・「五月ながの雨のころ、ひさしくたえ侍りにける女のもとにまかりたりければ、女」・一八五・（よみ人しらず））、「ひるはきてよるはわかるる山どりのかげ見る時ぞねはなかれける」（『新古今和歌集』恋歌五・（「題しらず」）・一三七二・読人しらず）等。

④**下句すこし心ゆかぬやうに侍**―「そのまゝ」の内実が理解しにくい表現の不足を難じたものか。「契をきしそのまゝにひぬ」と続けると理解しやすい。

【通釈】

九十四番

左（歌）　（権大納言源）通忠

最後とも思ったりもしないで（次を）約束したのだろうか。（けれども相手の心変わりによって）約束を交わした時のままで乾かない（私の）袖の涙・・・

右（歌）　勝　（権大納言藤原）実雄

（相手が離れたことを）つらく思って私だってあの人のことなどもう忘れてしまったと気持ちのないようなことをいっても（相手の心変わりはやはり）つらくて（実際には）声をあげて泣き続けてしまう。

〔判詞〕左歌（の）下の句は（意味として）すっきりしないようでございます上に、右歌（の）心、そのような事もございますでしょうと珍しくございますので、（右の）勝ちでございましょう。

〈九十五番〉

九十五番

左　勝　イ　定雅　ロ

いたつらに明ぬくれぬと玉くしけ②二たひあはぬ身こそつらけれ　新後撰①　い

右　公相　きんすけ　ニ　古本

忘れぬも我身のとかとしるはかりありしにかはるあかつき③もかな　ホ

右有しにかはる暁もかな（ヘ）、優なるさまにきこえ侍る（チ）（ト）を、④心いかにと侍にか、短慮まとひて思わき侍らぬ程、左ことはり（リ）かくれなく侍れは、勝侍へし（ヌ）、

【校異】

イ　勝―ナシ（書）　ロ　定雅―権大納言定雅（書・内・支・聚・群）　ハ　新後撰―ナシ（書・内・支・群）、続後撰、恋四（聚）

ニ　公相　きんすけ　古本―権大納言公相（書・内・支・聚・群）

ホ　しるはかり―しりにけり（内・支・聚・群）　ヘ　もかな―もかなと（内・聚・群）　ト　さまに―さまには（書・内・聚）、やうには（群）　チ　侍るを―侍に（書・内・聚・群）　リ　ことはり―詞は（内・聚・群）　ヌ　勝侍へし―勝へし（内・群）、勝なるへし（聚）　※（支）は、判詞が全て欠

【他書所伝】

〈左歌〉

『新後撰和歌集巻』恋歌四・一〇五九・「宝治元年、十首歌合に、逢不遇恋」・花山院入道右大臣

いたづらに明けぬくれぬと玉くしげふたたびあはぬ身こそつらけれ

〈右歌〉ナシ

【語釈】

①**いたつらに明ぬくれぬと**―「みねふかき山さくらどのいたづらに明けぬくれぬと花ぞふりしく」（承久元年（一二一九）『内裏百番歌合』深山花・十六番左・三一・為家）、「いたづらに明けぬ暮れぬと住侘びぬ人めかれ行く草のとざしは」（『洞院摂政家百首』雑・山家五首・一六〇八・経通）等、中世には数例みえる。

②**玉くしけ**―玉匣。玉櫛笥とも。玉は美称で、櫛等の化粧道具を入れる立派な箱。「明」「二（ふた）」「身」は縁語。「海辺月」題五十七番（『表現技術研究』第4号所収）参照。

③**あかつきもかな**―「暁であってほしい」の意で、八代集にはみえない言い回し。「見ぬもうしみてもわりなし夢故に物を思はぬ暁もがな」（『林葉和歌集』恋歌・八九〇・「暁恋、右大臣家歌合」）、「いかにせん夕つけどりのおのづからなく音をいとふあかつきもがな」（『道助法親王家五十首』恋・寄鳥恋・九三三・知家）等。

④**心いかにと侍にか**―「ありしにかはる」が具体的にどういった状況を指すのかが曖昧な点を難じたものか。

【通釈】

九十五番

左（歌）　勝　（権大納言源）定雅

（このまま）甲斐なく明けた暮れたと（月日を過ごし）二度と（あの人と）逢わない我が身は本当に苦しいことだなあ。

右（歌）　（権大納言西園寺）公相

（相手が忘れたのなら私も相手を忘れないといけないのに、私の方はあの人を）忘れないのは我の罪と知らされるばかり。（あの人に逢っていた頃と）違う暁であってほしいなあ。

〔判詞〕右（歌）「有しにかはる暁もかな」（という表現は）、優美であるように聞こえますが、（一首全体の）心はどうでございましょうか。浅慮に惑って判別出来ませんうちに、左（歌の）道理ははっきりしてございますので、勝でございましょう。

〈九十六番〉

九十六番

左　　公基イ

①今こむといひし契やあた②人のたゝ偽のなさけなりけんロ

右　勝ハ　　為教ニ

思きやかゝるつらさを契にて有し③その夜をかきるへしとは

左右ともに同ほとにホみえ侍に、今こんといひし

はかりにてもあ④ふ心にはへかよひト侍らめと、ありし其

夜はたしかに侍れは、⑤哥合のならひチ勝と申侍へきにや、

【校異】

イ　公基―権大納言公基（書・内・支・聚・群）　ロ　なりけん―なるらん（書・内・支・聚・群）　ハ　勝―ナシ（書）　ニ　為教―為教朝臣（書・内・支・聚・群）　ホ　ほとに―ほとには（書）　ヘ　心には―心に（支）　ト　かよひ―かなひ（内・支・聚・群）　チ　哥合の―哥合（書）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『題林愚抄』恋部二・逢不遇恋・六九六九・「（宝治元仙洞歌合）」・為教朝臣

思ひきやかかるつらさをちぎりにて有りしそのよにかぎるべしとは

【語釈】

①**今こむといひし契**―男が女に対して今すぐに行くよと言った約束のことで、「今こむといひしばかりに長月のありあけの月をまちいでつるかな」（『古今和歌集』・恋四・六九一・「（題しらず）」・素性）をふまえた表現である。

②**あた人のたゝ偽のなさけなりけん**―約束したにもかかわらず訪れないので、移り気な人のひとえに偽りの情愛であった、と恨みを述べる意。あるいは、「こぬ人をうらみもはてじちぎりおきしそのことのはもなさけならずや」（『詞花和歌集』恋下・二四八・「新院位におはしましし時、雖契不来恋といふことをよませ給けるによみ侍りける」・忠通）、「いつはりのことのはならんとおもへどもちぎるはなほもなさけなりけり」（『六百番歌合』恋上・契恋・九番左・六七七・季経）などの例のように、男が約束したにもかかわらず訪れないことは、ひとえに移り気な人の偽りではあるけれど、その約束はせめてもの思いやりなのだと捉える発想か。「逢不遇恋」題では、相手を

恨むよりは一途に恋情を吐露することが多いことから、試みに後者として解釈する。

③有しその夜をかきるへし―「ふえ竹のあなあさましのよの中やありしやふしのかぎりなるらん」（『千載和歌集』雑歌下・誹諧歌・一一九一・「堀河院御時百首のうち、恋の歌とてよめる」・基俊）、「いかがせむ有りし別をかぎりにて此世ながらの心かはらば」（『拾遺愚草』恋・二六五五・「ひさしくかきたえたる人に」）などの例のように、あなたと逢ったその夜を最後の機会とするという意。

④あふ心にはかよひ侍らめと―左歌の「今すぐに行くよと言った」という表現だけでも「逢不遇恋」題の一度逢う心には通うものがあるが、右歌の「あなたと逢ったその夜」のほうが題意がはっきりと現れている点を勝負の根拠として指摘する。

⑤哥合のならひ―題意に適う歌を勝とするのが、歌合批評の習わしである。『千五百番歌合』春四・二百二十九番（俊成判）などに例が存する。

【通釈】

九十六番

左（歌）　（権大納言西園寺）公基

今すぐに行くよと言った約束は、ひとえに移り気な人の偽りではあるけれど、せめてもの思いやりだったのだなぁ。

右（歌）　勝　（藤原）為教（朝臣）

思ってもみたであろうか。このような冷淡な仕打ちとなることを二人の宿縁として、あなたと逢ったその夜を最後の機会とすることになろうとは。

〔判詞〕左右（の歌は）ともに同じほど（の出来）であるとみえますのに、（左歌の）「今こんといひし」という表現だけでも題の一度逢う心には通うものがありますが、（右歌の）「ありし其夜」は題意がはっきりと現れておりますので、歌合の習わしとして（右歌の）勝と申すべきでしょう。

〈九十七番〉

九十七番

左　勝イ　中―為経ロ

つれなくそいきてつらさを歎けるニ①あふにかへてし命ならすやい続後撰

右　信実朝臣

いとはる、つらさある世の逢事を何そはホまたとたのめ②へをきけん

なにそは又とたのみトをきけんといへる心、おかしく③

思ひ入てことにチよろしく侍を、いきてつらさをなけ

きけるあふにかへてし命ならすやと侍こそ殊リ

艶に侍れ、右すてかたく侍れとも、左猶勝侍ヌへきにや、

【校異】

イ　勝―ナシ（書）　ロ　中――中納言（書・内・支・聚・群）
ハ　続後撰―ナシ（書・内・支・群）、続後撰、戀四（聚）
ニ　歎ける―歎きつる（支）　ホ　何そは―何そ（内）
ヘ　たのめ―契（書）　ト　たのみ―たのめ（内・支・聚・群）
チ　ことに―こと葉（書）、詞（内・支・聚）、ナシ（群）
リ　殊―ことに（書・内・支・聚・群）　ヌ　侍―ナシ（書）

【他書所伝】

〈左歌〉

『続後撰和歌集』恋四・八七一・「十首歌合に、逢不遇恋」・太宰権帥為経

つれなくぞいきてつらさをなげきけるあふにかへてしいのちならずや

〈右歌〉

『万代和歌集』恋歌四・二三七〇・「十首御歌合に、遇不逢恋を」・信実朝臣

いとはるるつらさあるよのあふことになにそはまたとたのみおきけん

『題林愚抄』恋部二・六九七〇・（宝治元仙洞歌合）・信実朝臣

いとはるるつらさあるよのあふことをなにぞは又とたのめおきけん

【語釈】

①**あふにかへてし命ならすや**―逢うことに代えて、捨てたはずの命ではなかったか、の意。下句が完全に一致する例として「いきてなぞのちのつらさをなげくらむあふにかへてしいのちならずや」（『万代和歌集』恋歌四・二三九九・「（遇不逢恋のこころを）」・法橋顕昭）が確認される。またこの他に次のような例が、逢うことの引き換えに命を捨てるという発想の先行例として「いのちやはなにぞはつゆのあだ物をあふにしかへばをしからなくに」（『古今和歌集』恋二・六一五・「（題しらず）」・とものり）など、多数確認できる。なお、「恋ひ死ぬ」の語を用いた歌に代表されるように、恋ゆえに命を捨てるという発想による歌そのものは『万葉集』以来たいへんに多い。

②**たのめをきけん**―「たのめをきけん」の箇所は、後続の判詞中の本文引用箇所も含めて、諸本の本文が一定しない。【校異】に示したように「たのめ」「たのみ」「契」の三つの形があるが、底本本文どおり「たのめお（を）く」として通釈する。

③**おかしく思ひ入て**―「やがて嫌われ逢えなくなることもあり得る逢瀬と分かっていたはずなのに、相手の「また（逢いにくるよ）」という言葉を当てにしてしまった」という右歌に対して、いったん肯定的な評価を与える言葉。右歌の理に傾いた内容について、特に評したものか。

【通釈】

九十七番

左　勝　　中（納言藤原）為経

そしらぬ顔をして、生きたまま（逢えぬ）つらさをかこつことだ。逢うことに代えて、捨てたはずの命ではなかったか。

右　　（藤原）信実朝臣

嫌われるつらさというものがあるこの世での逢うことなのに、どうして「また（逢いにくるよ）」と、あてにさせるようなことを言い置いたのだろうか。

〔判詞〕「なにそは又とたのみをきけん」という（一首の）心は、興深く思いを入れていて特によろしいのですが、「いきてつらさをなけきけるあふにかへてし命ならすや」とありますのこそ、特に艶でありましょう。右歌は捨て難いのですが、左歌をやはり勝とするのがよろしいでしょう。

〈九十八番〉

九十八番

左　　奪イ通成

ロ今はた、か①さねし袖のうつりかも心のうちにのこる斗ハそ

右　勝ニ　　奪ホ雅光

うしとても恨ははてしかた②糸のなからへは又あふ夜ありやと

左袖のうつりか、さもへとおほえ侍を、③とこの枕ねやの

むしろなとをトきて、心のうちにしものこるにかチとお

ほつかなく侍リり、右かたいとのなからヌへは又あふ夜あり

やと侍ル、させるとかむへきふしもみえ侍らねは、為勝、

【校異】

イ　奪―通成―右衛門督通成（書・内・支・聚・群）　ロ　ナシ―新続古、恋四（聚）　ハ　斗そ―はかなさ（内・支・聚・群）

ニ　勝―ナシ（書）　ホ　奪―雅光―右近中将雅光（書・内・聚・群）、右近衛中将雅光（支）　ヘ　さもと―さもやと（書）　ト　なとを―きて―なとをきて（内・支・群）　チ　にかと―かと（内・支・聚・群）　リ　侍り―侍る（聚）　ヌ　なからへ―存命（群）

ル　侍―侍に（書）

【他書所伝】

〈左歌〉

『新続古今和歌集』恋歌四・一四〇三・「宝治元年九月十三夜内裏十首歌合に、遇不会恋」・土御門入道前内大臣

いまはただかさねし袖のうつり香も心のうちに残るばかりぞ

〈右歌〉

『万代和歌集』恋歌四・二三八二・「十首御歌合に、遇不逢恋を」・右近中将雅光

うしとてもうらみははてじかたいとのながらへばまたあふよありやと

【語釈】

①かさねし袖のうつりか―『建礼門院右京大夫集』に「わびつつはかさねし袖のうつり香におもひよそへてをりしたちばな」（一五二・「かへし」・建礼門院右京大夫）という類例がみえる。

②かた糸のなからへは又あふ夜ありやと―「かた糸」（片糸）は、縒り合わす前の細糸。ここでは、「かたいとをこなたかなたによりかけてあはずはなにをたまのをにせむ」（『古今和歌集』恋歌一・四八三・「（題しらず）」・読人しらず）等の如く、「あふ」に「逢う」意を掛ける。また、糸を縒り合わせて長くすることから、「よりかけてまだ手になれぬ玉のをのかたいとながくたえやはてなん」（『拾遺愚草』一四五六・「不遇恋」）、「としをへて思ひやよわるかた糸のながらへて見る玉のをもがな」（『隣女集』恋・一四一七・「（久恋）」）等とも詠まれる。

③とこの枕ねやのむしろなとをゝきて、心のうちにしものこるにかとおほつかなく侍り―移り香は、枕や筵と縁がある表現なのに、それらの表現を用いず「心のうちにのこる斗そ」と詠じた点を難じたもの。「心にも袖にもとまるうつり香をまくらにのみやちぎりおくべき」（『建礼門院右京大夫集』一四八・「返りてのちみつけたりけるとて、やがてあれより」・資盛）、「あかざりし袖のかたみのうつりがを枕にのこすよはのむめがえ」（『親清五女集』一六六・「梅薫枕」）等は、判詞の指摘と符合する例。

【通釈】

九十八番

左（歌）　右衛（門督源）通成

今となっては（昔）重ねた袖の移り香も（消えてしまって）心の中に残るばかりだよ・・・

右（歌）　勝　右近（衛中将源）通光

つらいけれども恨み切ることはするまい。片思いと言っても（細糸を縒り合わせて長くなるように）永らえばまた（あの人に）逢う夜がありはしないかと（思われるので）・・・

〔判詞〕左（歌）「袖のうつりか」、そうであろうとも思えますが、「とこの枕」「ねやのむしろ」など（の表現）を差し置いて、（香りが）心の内にだけ残る（と理解する）のかと（表現として）あいまいでございます。右（歌）「かたいとのなからへは又あふ夜ありや」とございます、これといった非難すべき節もみえませんので、勝とする。

〈九十九番〉

九十九番

左　持（イ）

①たのめをきし②我身やあらぬ（ハ）とはかりを　③今（ニ）一たひはいかてとはまし

右　弁内侍

④（ホ）またれしを⑤かはるつらさと思ふまにやかてこぬ夜のつもりはてぬ（ト）（へ）る

左は、道雅卿、おもひたえなんの心優に侍れとも、（チ）をよひ

かたく侍にや、右又（リ）、やかてもちりのといへる（ヌ）事ならひて、（ル）⑥

共に心詞（ヲ）⑦ふるきを思ふに（ワ）、おなし程（カ）にて、為持、

【校異】

イ 持―ナシ（書） **ロ** 兵――兵部卿（書・内・支・聚・群）

ハ とはかりを―と斗を（内）（本ノマヽ） **ニ** 一たひは―一度を（内・支・聚）、一たひと（群） **ホ** ナシ―新續古、戀四（聚） **ヘ** つもり―つもる（支） **ト** はてぬる―ぬる哉（書）、はかなさ（支）

チ をよひ―おもひ（内・支・聚・群） **リ** 又―ナシ（内・支・聚・群） **ヌ** ちりの―ちりての（支） **ル** ならひて―かよひて（書・内・支・聚・群） **ヲ** ふるきを―ふかきを（内・支・群）、ふかき（聚） **ワ** 思ふに―おもへり（書）、かす（内・支・群）、おもひ（聚） **カ** 程にて―程とて（書）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『新続古今和歌集』恋四・一四〇四・「（宝治元年九月十三夜内裏十首歌合に、遇不会恋）」・後深草院弁内侍

またれしをかはるつらさと思ふまにやがてこぬ夜のつもりはてぬる

【本歌】

〈左歌〉

『後拾遺和歌集』恋三・七五〇・「（伊勢の斎宮わたりよりのぼりてはべりけるひとにしのびてかよひけることを、おほやけもきこしめしてまもりめなどつけさせたまひてしのびにもかよはずなりにければよみはべりける）」・左京大夫道雅

いまはただおもひたえなんとばかりを人づてならでいふよしもがな

【参考歌】

〈左歌〉

『千載和歌集』恋五・九二七・「題不知」・俊恵

君やあらぬわが身やあらぬおぼつかなたのめしことのみなかはりぬる

〈右歌〉

『千載和歌集』恋四・八八〇・「恋のうたとてよめる」・さぬき

ひとよととてよがれし床のさむしろにやがてもちりのつもりぬるかな

【語釈】

①たのめをきし―（あなたが）あてにさせた、の意。「たのめおくことの葉だにもなきものをなににかかれるつゆのいのちぞ」（『金葉和歌集』二度本・恋上・四二〇・「（恋のこころを人にかはりて）」・皇后宮女別当）、「よひのまもまつに心やなぐさむといまこんとだにたのめおかなん」（『千載和歌集』恋三・八〇三・「（百首歌たてまつりける時、恋のこころをよめる）」・上西門院兵衛）などのように、女性が男の不実を恨む歌で用いられる場合もあるが、当該歌では、【本歌】と同様に、何らかの事情で逢えなくなった女を恨む男の心で詠じられている。

②我身やあらぬ―我が身は同じ我が身ではないのか、の意。【参考歌】に掲げた俊恵歌により、言外に、あなたは元の同じあなたではないのか、の意を含ませているか。「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身

ひとつはもとの身にして」（『古今和歌集』恋五・七四七・業平、『伊勢物語』第四段）の世界が髣髴とされる。

③**今一たひは**―せめてもう一度だけは、の意。「あらざらんこのよのほかのおもひいでにいまひとたびのあふこともがな」（『後拾遺和歌集』恋三・七六三・「ここちれいならずはべりけるころ人のもとにつかはしける」・和泉式部）。

④**またれしを**―（相手の訪れが）自然と待たれましたが、の意。「を」は軽い逆接を表す。「いりあひのおとにつけてはまたれしをねよとのかねに思ひよわりぬ」（『六百番歌合』恋上・待恋・十三番左・六八五・顕昭）

⑤**かはるつらさ**―（相手の心が）変わってしまう辛さ、の意。「いきて又かはるつらさを見つるかな心にかなふいのちならねば」（『洞院摂政家百首』遇不逢恋・一三〇四・大納言四条坊門）。

⑥**ならひて**―学んで、または、真似をしての意。本歌合では、「右ふるき哥のことはおなし句（詞イ）にならひてめつらしき心きこえすや侍らん」（百十二番判詞）という例があり、否定的な評語である。他本の「かよひて」だと、似通っての意となる。いずれにせよ【参考歌】に掲げた二条院讃岐歌との表現・趣向上の共通点が問題になっている。

⑦**心詞ふるきを思ふに**―他本では、「ふるき」を「ふかき」とするものが多いが、底本の方が意味を取りやすい。「詞は古きを慕ひ、心は新しきを求め、及ばぬ高き姿をねがひて……」（『近代秀歌』）などと考えるのが定家の教えである。ここでは、両首ともに、古歌の詞・歌境を志向している点を一応認めてはいるが、それほどの成果は得られていないと判じられている。

【通釈】

九十九番

左（歌）　持　　兵（部卿藤原）有教

（あなたが）期待させた私は、昔の私ではないのですか（あなたは昔のあなたではないのですか）と、ただそれだけを、せめてもう一度だけは何とかして尋ねたいものです。

右（歌）　　弁内侍

（あの時は、あなたの訪れが）待たれましたが、（あなたの）心変わりが辛いと思っておりますうちに、そのまま（あなたが）通って来ない夜の日数がすっかり積もり重なってしまったことです。

〔判詞〕左は、道雅卿の、「おもひたえなん」の歌の心が優美に感じられますが、（道雅卿の歌には）及びがたいのではないでしょうか。右もまた、「やかてもちりの」という歌の表現に学んでいて、両首共に心や詞が古いことを心掛けていますが、同じ程度のもので、持とします。

〈百番〉

百番

左　　奪（イ）師継

①忘らるゝ思にきえぬ命こそをのか物からうらみられけれ

右　勝ハ　　雅忠朝臣ニ

ホはかなしやたか心よりとたえしてみる夜へもしらぬ夢のうき橋

左心おかしく侍に、④下句そ我身をはうらみぬ事チ

といひさためたるやしリに侍、右ゆめのうきはし、心⑤もうかヌれたるさまに侍れと、こと葉つゝき優ルなるすかたヲに侍れは、まさると申へきにこそ、

【校異】

イ　右近――右近中将（書・内・聚・群）、右近衛中将（支）

ロ　けれ―ける（内）　ハ　勝―ナシ（書）　ニ　朝臣―ナシ（内・支）　ホ　ナシ―續拾遺、戀五、（聚）　へ　夜も―よし（支）

ト　心おかしく―おかしく（支）　チ　事と―事に（書・内・支・聚・群）　リ　いひさためたるやしに―いひさためたるやうに（書・内・聚・群）、いひさためやうに（支）　ヌ　さま―やう（書）

ル　優なるすかたに―優なるすかた（内・群）、優にすかた（支）

ヲ　申へきに―申へき（支）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉『続拾遺和歌集』恋歌五・一〇四八・「（題しらず）」・大納言雅忠

はかなしやたが心よりとだえしてみるよもしらぬ夢の浮橋

【語釈】

①忘らるゝ思にきえぬ命―自分の恋心が相手に忘れられ、悲しくて死んでしまいたいが、それでもなお消えずにいる命。「思」に「おもひ（火）」を掛ける。「火」と「きえぬ」は縁語。「うつりがのうすくなりゆくたきもののくゆるおもひにきえぬべきかな」（『後拾遺和歌集』恋一・七五六・「あるをんなに」・清原元輔）、「よとともにうき人よりもつれなきはおもひにきえぬいのちなりけり」（『千五百番歌合』恋二・千二百十一番右・二四二一・惟明親王）。

②みる夜―夢を見る夜と男女が逢う夜を掛ける。「せきかへす涙の川にうきねしてみる夜の夢のさだかにもあらぬ」（『後鳥羽院御集』一五九四・「依忍増恋」）。

③夢のうき橋―夢。『源氏物語』の最終巻名を、藤原定家が「春の夜のゆめのうき橋とだえして峰にわかるる横雲のそら」（『新古今和歌集』春歌上・三八・「守覚法親王、五十首歌よませ侍りけるに」）と詠んで以来、和歌で用いられるようになる。「とたえして」は夢が途切れることと男女の逢瀬の途絶えの意を掛ける。「はかなしや夢のわたりの浮橋を頼む心の絶えも果てぬよ」（『狭衣物語』一五二・狭衣）。

④下句そ我身をはうらみぬ事といひさためたるやしに侍―左歌の下句の表現では、自分の命を恨むばかりで、我が身の方は恨まないことと取り決めたかのようであるということ。「やし」は諸本によって本文を改める。

⑤心もうかれたるさまに侍れと―右歌では「夢のうき橋」という表

現だけでなく、歌の趣旨も恋心が抑えきれず落ち着かない様子を詠んでいるという意。

【通釈】

百番

左（歌）　　右近（衛中将藤原）師継

私の思いは（あなたに）忘れられ、死んでしまいたいが、（それでもなお）消えない命は、我が物ながら恨まれることだよ。

右（歌）　勝　　（源）雅忠朝臣

はかないものだなあ。誰の心変わりによって途絶え、見られる夜もわからない夢なのか。

〔判詞〕左は歌の趣旨が面白くございますが、下句では（まるで）我が身を恨まない事に取り決めたかのようでございます。右の「ゆめのうきはし」は、心もしっかりしていない様子ですが、ことばの続きが優美な姿でございますので、（右歌が）勝っていると申しあげるべきでしょう。

〈百一番〉

百一番

左　勝イ　　沙弥蓮性

①たのめてもこぬ偽にふけし夜をなかくや人の忘はてけるロ

右　　下野

②おとろかす人しなければ今はたゝみしは夢かと誰に問はましト

左、こぬいつはりにふけし夜ト、ことによろしく侍めり、右もみしは夢かとたれにとはましなというに侍れとも、③今はたゝといへるほと、をとり侍へし、

【校異】

イ　勝―ナシ（書）　ロ　忘はてける―忘果ぬる（書）、わかれはてける（内・支）、別はてけるぬイ（聚）、別はてぬる（群）　ハ　ナシ―續拾遺、戀三（聚）　ニ　夜―夜を（内・支・聚・群）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『続拾遺和歌集』恋歌三・九四二・「宝治元年十首歌合に、逢不遇恋」・後鳥羽院下野

おどろかす人しなければ今はただみしは夢かと誰にとはまし

【語釈】

①**たのめてもこぬ偽**―私に頼みにさせていながら来ない偽りの状態の意。「たのめつつこぬ夜あまたに成りぬればまたじと思ふぞまつにまされる」（『拾遺和歌集』恋三・八四八・「題しらず」・人麿）、「たのめつつこぬいつはりのつもるかなまことのみちにいりし人さへ」（『建礼門院右京大夫集』一二九・「しりたる人のさまかへたるが、

こんといひておともせぬに」）などの例がみえる。

②**おとろかす人しなければ**―「あさましやみしはゆめかととふほどにおどろかすにもなりぬべきかな」（『後拾遺和歌集』恋三・七三四・「頼綱朝臣ちちのともにみののくににはべりけるとき、かのくにのをむなにあひてまたおともしはべらざりければ女のよめる」・読人不知）をふまえた表現。自分に逢いに来てくれる人の不在を嘆く。

③**今はたゝ**―一度逢って後再び逢えない現在の状況を詠むのが「逢不遇恋」題であるので、「今はたゝ」とわざわざ詠む必要はないというのが判者為家の批判であると考えられる。

【通釈】

百一番

左（歌）　沙弥蓮性

私に頼みにさせていながら来ない偽りの状態のまま更けた夜を長く私が感じるように、永久にあの人は忘れ果ててしまったのだ。

右（歌）　勝　下野

（自分に逢いに来て）気付かせてくれる相手がいないので、今となってはもう現実にお逢いしたのは夢かと一体誰に尋ねたらよいのであろうか。

〔判詞〕左（歌の）、「こぬいつはりにふけし夜」、特によろしゅうございます。（右歌）も「みしは夢かとたれにとはまし」などという表現は優でございますが、「今はたゝ」という部分は、劣っておりましょう。

〈百二番〉

百二番

左　勝（イ）　為氏朝臣

ロ 續千載①

ありしよをこふるうつゝはかひなきに夢②になさはや又③もみるや（ハ ゆイ）

と

右　少将内侍

④夢にたに今はみゆとはみえした、⑤忘れし人にそはぬ（ホ）身なれは

おなし夢、左（へ）、めつらしく見なして（ト）侍にや、為勝、

【校異】

イ　勝―ナシ（書）　**ロ**　續千載―ナシ（書・内・支・群）、續千載、戀三（聚）　**ハ**　みるやと（ゆイ）―みるやと（書）、みゆやと（内・支・聚・群）　**ニ**　みゆとは―みゆとも（書）　**ホ**　そはぬ―そめぬ（内・支）　**へ**　左―左は（書・内・支・聚）　**ト**　見なして―見なし（内・支・聚・群）

【他書所伝】

〈左歌〉

『続千載和歌集』恋三・一四一二・「宝治元年十首歌合に、遇不逢恋」・前大納言為氏

ありし夜をこふるうつつはかひなきに夢になさばや又もみゆやと

『題林愚抄』六九四一・「（続千）／逢不遇恋」・為氏

ありしよをこふるうつつはかひなきに夢になさばや又もみゆやと

〈右歌〉ナシ

【参考歌】

〈左歌〉

『後拾遺和歌集』恋二・六七五・「をむなにつかはしける」・西宮前左大臣

うつつにてゆめばかりなるあふことをうつつばかりのゆめになさばや

〈右歌〉

『古今和歌集』恋四・六八一・「（題しらず）」・伊勢

夢にだに見ゆとは見えじあさなあさなわがおもかげにはづる身なれば

【語釈】

①**ありしよを**―過ぎ去ったむかしの逢瀬の夜を、の意。「有りし夜やうら島が子の箱ならんあけにし日より逢ふ事のなき」（『堀河百首』遇不逢恋・一二一二・永縁）「よ」には、「世」（男女の仲）を響かせる。「めのまへにかはりぬめりとみるものをまたわすれずやありしよのこと」（『和泉式部集』六〇七）。

②**夢になさはや**―夢にしてみたいものです、の意。現実は甲斐がないのでその代わりに夢を頼みとするという趣向は、小町歌「うたたねに恋しきひとを……」（『古今和歌集』恋二・五五三）に代表される伝統的な発想である。直接は、【参考歌】に掲げた後拾遺歌を念頭に置く。この後拾遺歌は、『和泉式部集』に採録されており（五八四・「（人のおきたりけるかがみのはこを、かへしやるとて）」）、作者は和泉式部かと思われる。なお、和泉式部には、「うつつにて思へばいはむかたもなし今宵のことを夢になさばや」（『和泉式部集』四一七、『和泉式部日記』一三二にも）という歌もある。

③**又もみるやと**―もう一度（夢で）見えるかと思って、の意。「見る」という自分の意志で行う行為よりも、「見ゆ」とするイ本注記などの本文が適切であろう。「おもひかね夢にみゆやとかへさずはうらさへ袖はぬらさざらまし」（『千載和歌集』恋三・八二八・「題不知」・頼政）。

④**夢にたに今はみゆとはみえしたゝ**―（あなたと逢えなくなった）今となっては、せめて夢の中だけでも（あなたに）見えているとは、ただもう思われたくはないのです、の意。【参考歌】に掲げた伊勢歌を念頭に置いた表現。「みえしたゝ」は、「ただ見えじ」の倒置表現。

⑤**忘れし人にそはぬ身なれは**―（私のことを）忘れたあの人に寄り添わない我が身ですので、の意。二人の仲が疎遠になっても心（魂）は身から離れてあの人の許へさまよい行くという発想が根底にある。「ものおもへばさはのほたるをわがみよりあくがれにけるたまかとぞみる」（『後拾遺和歌集』雑六・神祇・一一六二・「をとこにわすられて侍けるころきぶねにまゐりてみたらしがはにほたるのとび侍けるをみてよめる」・和泉式部）がよく知られている。「いとはるるみ

をうしとてや心さへわれをはなれて君にそふらん」（『千載和歌集』恋三・八三〇・「題不知」・隆親）なども一例。【参考歌】に掲げた伊勢歌の趣向をなぞりつつ、下句の状況を替えて、「遇不逢恋」の心を表した。

【通釈】

百二番

左（歌）　勝　　（藤原）為氏朝臣

昔の、あの逢瀬の夜のことを恋しく思う今の現実は甲斐のないものですので、いっそのこと夢にしてみたいものです。もう一度（夢で）見えるかと思って。

右（歌）　　少将内侍

（あなたと逢えなくなった）今となっては、せめて夢の中だけでも（あなたに）見えているとは、ただもう思われたくはないのです。（私のことを）忘れたあの人に寄り添わない我が身ですので。

〔判詞〕同じ夢（を題材とした歌で）、左は、珍しく捉えてございますでしょうか。勝とします。

〈百三番〉

百三番

左　　経朝朝臣

暁①はつらきならひの鳥②の音を③二たひきかぬ契なりけり

右　勝イ　　沙弥禅信

思きや手④枚ふれし朝ねかみみたれてし又ロもイ恋ん物とはハ

左、上句はよろしく侍を、⑤八声の鳥のねふたゝひホ

きかぬといへる心、おほつかなくや、二夜といへる心なる

へきにやヘ、あふ事は、一夜逢たるによりて、題心トふかゝ

るへきにあらさるにやチ、右、手枚リふれしあさねかみヌ、

作者⑥面影ルヲいかゝとおほえ侍れワと、勝侍へし、

【校異】

イ　勝―ナシ（書）　ロ　し又―もまたもイ（書）、も又（内・支・聚・群）　ハ　とは―かは（支）　ニ　上句は―上句（内・支・聚・群）

ホ　いへる心なるへきにや、あふ事は、一夜―ナシ（書）

ヘ　あふ事は―あふ事（内・支・聚・群）　ト　題心―題の心（内・支・聚・群）　チ　にや―や（内・支・聚・群）　リ　手枚―枕（内・支・群）　ヌ　あさ―あした（支）　ル　作者―作者の（書・内・支・聚・群）　ヲ　いかゝと―いかにとは（書）、いかゝとは（内・支・聚・群）　ワ　侍れと―侍れとも（書）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ　〈右歌〉ナシ

【参考歌】

〈右歌〉

『拾遺和歌集』恋四・八四九・「題しらず」・人麿

あさねがみ我はけづらじうつくしき人のた枕ふれてしものを

（『万葉集』巻第十一・正述心緒・二五七八、第三句「うるはしき」第四句「君が手枕」、『古今和歌六帖』第五・「かみ」・三一七五など）

『千載和歌集』恋二・七五三・「乍臥無実恋といへる心をよめる」・西住法師

たまくらのうへにみだるるあさねがみしたにとけずと人はしらじな

【語釈】

①暁はつらきならひ―暁は、逢瀬を過ごした男女の別れの時で、辛い憂きものとして詠じられる。「有あけのつれなく見えし別より暁ばかりうき物はなし」（『古今和歌集』恋三・六二五・「（題しらず）」・忠岑）

②鳥の音―鶏の鳴き声。男女の暁の別れを告げる。「ひとりねし時はまたれし鳥のねもまれにあふよはわびしかりけり」（『拾遺和歌集』恋二・七一八・「（はじめて女の許にまかりて、あしたにつかはしける）」・読人知らず）第二句「つらきならひの」は、初句を承け、第三句へ掛かる。

③二たひきかぬ契なりけり―二度は聞かない、（仮初めの）契りであったよ、の意。「けり」は、そのことに初めて気づいた意を表す。

④手枕ふれし朝ねかみみたれてし又―（あの人の）手枕が触れた（私の）朝寝髪が乱れてもまた、の意。「朝寝髪」は、朝の寝起きの乱れた髪で、男女が共寝した朝の様子を表す。「手枕ふれし朝ねかみ」は「みたれ」を導く序詞でもあり、「みたれ」には、気持ちが乱れる意を掛ける。なお、イ本注記や他の伝本の本文「みたれてもまた」が適切である。

⑤八声の鳥のねふたゝひきかぬといへる心、おほつかなくや、二夜といへる心なるへきにや、あふ事は、一夜逢たるによりて、題心ふかゝるへきにあらさるにや―「八声の鳥」は、鶏を指す。「おもひかねこゆるせきぢに夜をふかみやこゑの鳥にねをぞそへつる」（『千載和歌集』恋五・九四八・「隔関路恋といへるこころをよめる」・雅頼）『奥義抄』には、「鶏をば八声の鳥と云ふ。やこゑ鳴く故也」、『堀河院百首聞書』には、「庭鳥のはつ音、八こゑ鳴と申説候へども、たゞしげく鳴といへる心まで也」とあり、文字通り、「八声鳴く鳥」という認識があった。判詞では、八声鳴くという鶏の鳴き声を二度聞かないという趣向の意味するところが判然としない点が難じられている。「八声」に留意すれば、当該歌では、逢瀬の夜を過ごした男が、最初の鶏の鳴き声を聞いて慌ただしく帰った、とも解せよう。ただし、為家は、「二たひ」は、二夜と捉えるのがよく、一夜の逢瀬によって、「遇不逢恋」の題意がより深く表現されるのではないか、と考えているようである。

⑥作者面影いかゝとおほえ侍れと―評語としての「面影」は、歌から感じられる情景、詩的なイメージを意味するが、ここでは、文字通り、人の面ざし、面もち、風貌を意味するか。当該歌は、女性の立場で詠じられた恋歌で、「くろかみのみだれもしらずうちふせばまづかきやりし人ぞこひしき」（『後拾遺和歌集』恋三・七五五・「（題

不知)」・和泉式部)、「ながからむ心もしらずくろかみのみだれてけさは物をこそおもへ」(『千載和歌集』恋三・八〇二・「(百首歌たてまつりける時、恋のこころをよめる)」・待賢門院堀川)、「かきやりしそのくろかみのすぢごとにうちふすほどは面かげぞたつ」(『新古今和歌集』恋五・一三九〇・「題しらず」・定家)などのような、官能的な世界を志向したものであろう。僧が、女性の立場で恋歌を詠むことは珍しいことではないが、「手枕ふれしあさねかみ」という生々しい表現から、作者・禅信の面ざしが思わず想起されてしまったことを記したのであろうか。

【通釈】

百三番

左(歌)　(藤原)経朝朝臣

暁には辛い習いの鳥の音を二度とは聞かない、(仮初めの)契りであったことです。

右(歌)　勝　沙弥禅信

思いもしませんでした。(あなたの)手枕が触れた(私の)朝寝髪が乱れていたように、(こんなにも)思い乱れてもまた(あなたのことを)恋しく思うことになろうとは。

〔判詞〕左は、上句は悪くないのですが、八声の鳥の鳴き声を再び聞かないという趣向は、判然としないのではないでしょうか。(「二たひ」というのは)二夜という意味でありましょうか。逢瀬は、一夜逢ったことによって、題意がより深まるのではないでしょうか。右は、「手枕ふれしあさねかみ」は、作者の面ざしはどんなものであったかと思われますが、勝とするのがよいでしょう。

〈百四番〉

百四番

左　勝イ

①よひのまのふけ行かねの恨ロたに思ひたえても年へぬる(ハけイ)身を　②越前

右　ニ 為家

我はかり心③なかさをかたるとも見④ホしゆめとやは思ひあはせん

左哥今の世まて思つへけられ侍るらん、恋しき事に物忘せす、さもおかしくこそ侍れ、右のゆめかたり、⑤うけられす侍れは、又負侍へし、

【校異】

イ　勝―ナシ(書)　ロ　恨たに―限りたに(支)　ハ　へぬる(けイ)―へける(書・内・支・聚)、へぬる(群)　ニ　為家―前権大納言為家(書・内・支・聚・群)　ホ　見しゆめとやは―見しは夢とや(内・支・聚・群)　へ　つ、けられ―つ、けられて(内・聚)

【他書所伝】

〈左歌〉

『題林愚抄』恋部二・六九七二・「(宝治元仙洞歌合)」・越前

よひのまの深行くかねのうらみだに思ひたえでも年へける身を

〈右歌〉

『題林愚抄』恋部二・六九七三・「已上同（宝治元仙洞歌合）」・為家卿

我ばかり心ながさをかたるともみしは夢とやおもひあはせん

【語釈】

①**よひのまの**―越前の当該歌は、著名な「待宵の小侍従」の歌「まつよひのふけ行くかねのこゑきけばあかぬわかれの鳥はものかは」（『新古今和歌集』恋歌三・一一九一・「題しらず」・小侍従）と、「まちし夜のふけしをなにになげきけんおもひたえてもすごしける身を」（『金葉和歌集』二度本・恋部上・四〇二・「かたらひける人のかれがれになりてうらめしければつかはしける」・白河女御越後）を合体させた趣の歌。

②**思ひたえても**―「誰かはと思ひたえてもまつにのみおとづれてゆく風はうらめし」（『新古今和歌集』雑歌中・六二二・「守覚法親王、五十首歌よませ侍りけるに、閑居の心をよめる」・有家）や「うらみわび思ひたえてもやみなましなにおもかげのわすれがたみぞ」（『新勅撰和歌集』恋歌四・九二一・寂蓮）など、「思ひたえても」の句を含む複数の歌があるが、『新編国歌大観』では、当該歌の「思ひたえても」を「思ひたえでも」と解している。これに従う。

③**心なかさを**―「心なかさ」は、「いつまでも心がわりしないこと、誠実であること、また、その度合」（『日本国語大辞典』）。「君を思ふ心ながさは秋の夜にいづれまさると空にしらなん」（『後撰和歌集』恋四・八四二・「返し」・源是茂、※またざりし秋はきぬれどみし人の心はよそになりもゆくかな（同・八四一・「心ざしおろかに見えける人につかはしける」・なかきがむすめ）への返歌）などの用例があり、当該歌よりも後の歌に「あひみての心ながさを思ひやれつらきをだにも忘れやはする」（『続拾遺和歌集』恋歌三・九一八・「題しらず」・津守国基）の如き類想歌がある。

④**見しゆめとやは**―当該句は「見し夢とやは」（底本・書陵部本）と「見しは夢とや」（内閣文庫本・九州大学蔵支子文庫本・書陵部蔵類聚歌合本・群書類従本）の二つに本文が分かれている。後者が本来の形であれば、「見し（ふたりが逢って契りをかわしたの）は夢だったと（あの人は）思い合わせるであろうか」の意となり、前者が本来の形であれば、「（ふたりの逢瀬は（実は自分のみた）夢だったと（あの人は）思い合わせるのではないか（まさかそんなことはあるまい）」の意となる。本注釈の方針に従って、通釈は底本の本文のまま行うことにする。

⑤**うけられす侍れは**―信頼して受け入れられませんのでの意で、否定的評価語の一つ。

【通釈】

百四番

左（歌）　勝　　（嘉陽門院）越前

宵の間に、夜が更けて行くのを知らせる鐘の（音を聞きながらあ

の人の訪問を待っていた）あの恨みさえも（忘れず、あの人を）思いつづけて、もう何年も過ぎてしまったわが身だよ。

右（歌）　　（前権大納言藤原）為家

私ばかりが（あの人を忘れない）心長さを語っても、（あの人の方は、私と違って、ふたりのことは）見た夢だったと、思い合わせていることだろうか（まさかそんなことはないだろうけれど）。

〔判詞〕左歌は今の世まで（かわらず恋しく）思いつづけられていますのでしょう。恋しい事を（そのままに）物忘れせず、たいそう味わい深うございます。右（歌の）夢語りは、受け入れにくうございますので、又負けとなります。

〔付記〕

本稿は、平成二十年度文部科学省科学研究費補助金、若手研究（B）研究課題「和歌作品の調査、収集を通した鎌倉時代西園寺家像の再構築」（代表者　藤川功和）による研究成果の一部である。